

ハチ博士の ミツバチコラム

42



京都学園大学
坂本文夫名誉教授
(バイオ環境学部)

アカリランダニ②

アカリランダニが最初に認識されたのは百年ほど前で、英国のワイト島のセイヨウミツバチが短期間のうちに壊滅状態になった原因としてアカリランダニが疑われました。この

病状はワイト島病と呼ばれ、その後ヨーロッパから百年ほどかけて北欧や豪州を除く全世界のセイヨウミツバチに広まりました。ニホンミツ

バチへの寄生が報告されたのは5年前ですが、その後ほぼ全国でニホンミツバチへの寄生が確認されています。これは最近海外から入ってきたというよりは、これまで気付かなかったというのが正しいでしょう。

アカリランダニはミツバチの気門（人間の鼻に相当する外気の取り入れ口）から侵入し、気管（外気を全身に送る管）の中に寄生しますが、羽

化直後のピチピチの若いミツバチを好み、老齡のハチには寄り付かないそうです。寄生が広がるメカニズムは、卵を産める状態になった雌ダニが気管から出て、

周りにいる未寄生のハチに取りついて気門から入り込みます。ダニは気管の外では一日位しか生きておれないし、

羽を持たないので別のハチに飛び移ることはできません。しかし、身体を寄せ合い濃厚なスキンシップを繰り返すミツバチの群の中では、ハチの体毛にしがみ付いていれば、別の個体に移り移る機会があり、容易に寄生を拡大することができるとです。

一方、群間の移動はどうでしょう。寄生の広がりや群の中に留まっていれば、それほど大きい問題にはならなかったはず。ミツバチは仲間同士で体を寄せ合っているのに寄生が拡大するのは理解できませんが、隣の巣にも比較的容易に寄生が広がっているのは不思議なこと。ところが、雄バチの50%、働きバチの5%が他の群からの迷い込みであるという研究があります。また、盗蜜のためによその巣箱に押し入るハチもいます。このように高頻度の群間交流が他群への寄生拡大の原因であることは容易に予想できます。こうなれば、ミツバチ達の気門にマスクをかけさせるしかありません。



イラスト おおくほ ひとみ さん